
宵闇の王

神月きのこ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宵闇の王

【Nコード】

N8539D

【作者名】

神月きのこ

【あらすじ】

世界を統べる王がいた。彼に自由にならないものは何もない。金も女も、人の運命さえも。しかし、彼が満足することはない。

春エロス2008参加作品

月を求めて（前書き）

この小説は春エロス2008参加作品です。

*春エロス2008とは、18禁にならない程度のギリギリエロスを
目指す企画です。

春エロスで検索すると、他の作者様の小説が読めます。

*注意

性表現、暴力表現が頻繁に登場します。

それでもいいという方のみ、ご覧ください。

月を求めて

退屈している女が娯楽を求めるように。

闇の中で男が光を求めるように。

それは当然の成り行きだった。

月明かりすら届かない、闇の支配する室内に響く湿った音。
そして混ざり合う女の声。

甘い嬌声はいまや掠れた悲鳴と成り果てている。

狂ったように鳴く女を、八雲は冷めた目で見据えていた。

「……つまらんな」

小さな呟きであったが、組み敷かれている女は過敏にその言葉に反応する。

身を固く強張らせ、たった今まで快楽に上気していた頬は急速に青ざめていった。

「いいことを教えてやろう。明晩、女が1人来ることになっている」
耳元で囁くと、女の口から短い悲鳴が漏れ出た。

それは先程までとは明らかに違い、恐怖ゆえのこと。

「先日町に来た踊り子がかなりの美女という話でな」

耳を食み女を突き上げながら続ける。しかし、既に女は行為に意識を向けることができなくなっていた。

「お前は どうしたい？」

八雲の声が甘く響く。優しい響きを帯びてはいるが、女には却っ

て逆効果のようで、涙をボロボロと溢れさせる。

「い、いや……嫌あああつ」

「とはいえ、お前もそれなりに長く尽くしてくれた」

急に八雲の声音が変わる。

泣き叫ぶ女は、その淡々とした声に、ピタリと押し黙る。しかし、興奮状態の為に呼吸は荒い。

己の運命を握る男の次の言葉を震えながら待っていた。

「奴隷どもにくれてやろうかとも思ったが、お前をあまり苦しめるのも忍びない」

奴隷たちの性欲の捌け口となるか彼らの餌となるか、それが本来八雲に見放された女が辿る道である。

しかし、八雲の言葉からは、そのどちらでもないことが窺い知れた。

見開かれた女の瞳に、希望の色が宿る。

「だから……この場で楽に殺してやろう」

しかし、一瞬にして女の儚い期待は打ち砕かれた。

絶望に女の顔が歪む。

その変化に八雲の口元が楽しそうに笑みを描いた。

女の首元に指を這わせながら、強く腰を突き入れる。柔らかに女の首筋を撫ぜながら、律動を繰り返した。

女は恐怖と絶望に顔を染め、褥ふしに腕をついて後ずさるうともなく。だが、体格のいい男に組み敷かれ、首を押さえつけられては逃れられるはずもない。

八雲が指先に力を込めた。

鈍い音が八雲の手に伝わる。

声を上げることもなく、女は痙攣を繰り返す。口からは血と涎の交じり合った液体が頬を伝い耳元に落ちる。

膣に子種を注がれながら、女は絶命していた。

女から身体を離す八雲の顔には何の感慨も浮かんでいない。

己の衣服を整えると、彼は女に一瞥もくれることなく部屋を後にした。

「片付けておけ」

厚い雨雲を思わせる灰色の髪をかき上げ、待機していた側仕えに言いつける。

苛立たしげに命じられるのにも顔色一つ変えず、側仕えは一礼し部屋の中へと入っていった。

その姿を最後まで見届けることなく、八雲は自室に向かい歩を進める。

八雲は退屈していた。

一つの世界を丸ごと統べる王でありながら、満たされることのない空虚感を感じ続けている。

彼の思い通りにならないことなど何もない。

望めば何でも手に入る。金でも宝石でも、女でさえも。

人の運命ですら、彼の掌中に握られている。

それなのに一体何が足りないのだろう。何をすれば、この渇きは癒されるのだ。

八雲は窓の外を見上げながら、溜息をつく。

細い月が、雲の隙間から朧気に顔を覗かせていた。

昼間だというのに、謁見の間に差し込む光は弱い。

窓の外には薄い雲が広がっており、その為広間は薄暗かった。

その中を、一人の女が玉座の前に引き連れられてきた。

女の腰まである長い髪は、弱い明かりでありながらも光を反射して輝いている。

「お初にお目にかかります。八雲様」

跪く女の凜とした声に、八雲は片眉を上げた。

彼女は、王への献上品としてこの場にいる。残酷なる支配者への、だ。

だというのに、この落ち着き具合はどうしたことであろう。並の女ならばどれ程取り繕っても声の震えを抑え切れないというのに。

「顔を上げる。女、名前をなんと言う？」

促すと、長い髪に隠された女の容貌が露になる。

白い肌に紅の唇が際立つ。

「^{アカツキ}明月と、申します」

長い睫毛に縁取られた瞳は氷の色に似た青、ほんのりと色づいた頬。

踊り子であるというだけあり、確かに細い体は均整が取れている。

思わず八雲は息を呑む。

しかしそれは、女の容姿によるものではない。

今まで見たことのないほど力強い瞳に、八雲は射抜かれていたのだ。

どれだけじつと女の瞳を見ていただろうか。八雲は上機嫌に目を細めると、玉座から下り明月に歩み寄った。

跪いたまま己を見上げる明月の顎に手をかけ、視線を合わせる。

「明月。これより先、お前は私の為だけに踊ることになる。その覚悟はあるか」

「……覚悟ならば、してまいりました」

静かな声には、それでも張りがあり、耳に心地良い。

間近に見る明月の瞳は、より透明度が増しているように感じられた。八雲の鋭い目に見つめられて尚、彼女の目は揺るがない。

「決して私は貴方様のものにはならない、と」

決然と言い放つ。

さほど大きくはないはずの明月の声が、広く響き渡る。

「この女……！」

明月の隣に控えていた男がいきり立つ。彼女を連れてきただけに、どのような責を負わされるかと思うと明月の発言を見過ごせなかったのだ。

「黙れ、今は私が明月と話をしているところだ」

焦りから顔を真っ赤に染め上げる男を一睨みして黙らせる。

八雲は己と明月だけを広間に残し、他の者たちに退室するように命じた。これより先も、邪魔が入るに違いないと予想できたからである。

側近まで全員下がらせると、八雲は明月と視線を合わせた。

「ならばどうする。私を殺すか」

「残念ながら、私にはそのような力はございません」

「この場で自害でもするつもりか」

返事は鈴を転がすような笑い声だった。

「そのようなことをする理由がどこにありましょう」

八雲には女の言わんとすることが分からなかった。

現在、事実として明月はこの場にいる。逃げ出せるはずのない王

宮に。

「貴方様が手に入れられぬものなど、ないでしょう。そう、事実、貴方様は私を手にお入れになりました」

不可解な思いが表情に出ていたのだろ。 明月は滑らかに語りだした。

しかし、彼女の言葉は更なる疑問を八雲に与える。

「先程の言葉と矛盾しているのではないか」

「いいえ」

八雲の問いに、明月はきっぱりと反論する。

「私のこの身は全て貴方様の自由に。頭のとっぺんから爪の先まで、髪の一筋さえも貴方様の望みのままに。ですが」

そこで一度、明月は言葉を区切る。

瞬きの後、彼女は鋭く八雲を見据えた。

「貴方様は決して、私を手に入れることはできません」

「……」

「……」

暫しの沈黙。それを破ったのは、八雲の笑い声であった。クツクツと、決して大きな声ではなく、しかし確かに喉を振るわせる。

「お気に障ったのでしたらどうぞ、処分を」

「いいや、気に入った」

捕えていた明月の顎から、頬へと手を滑らせる。

「面白い。是が非でも私のものにしてやる」

それは、当然の成り行きだった。

「お前の言う、手に入れられないというのがどういことなのか。

私には分からない」

八雲は飽き飽きしていたのだ。
自由にならないことのない、この世界に。

「だが」

それならば。

「すぐに、そう宣告したことを後悔させてやる」

手に入らないものに強く惹かれるのも、必然だったのだろう。
退屈という闇の中で、八雲は光を見つけたような気がしていた。

月を求めて（後書き）

お読みくださりありがとうございました。

今のところ全3話、次回は3/20に投稿予定です。（話数、日付共に前後する可能性があります）

月を捕えて（前書き）

申し訳ありません！

更新時に、本来の冒頭部分を掲載し忘れていました。

普段メモ帳で書き、それをはりつけているのですが、冒頭を間違えたようです。

そして今まで気付かず…読んでくださっていた方、本当に失礼致しました。

月を捕えて

ろうそくの火が壁に陰影を刻む。

ゆらゆらと炎が揺らぐのに合わせて踊る影から、八雲は視線を腕の中の女へと移した。

淡い光に晒される白い肌は、未だ情事の火照りを残している。

「明月」

呼びかけると、背後から抱き締められていた女が振り返った。

「私は明日から一週間ほど留守にする」

「はい。お氣をつけていつてらっしゃいませ」

八雲が城を空けるとなると、それは公務に他ならない。

その為、特に疑問を投げかけることもなく、明月は返事をした。勿論一週間公務だけが続けるとも考えていないであろうが。

「寂しいか？」

問うと、明月は微笑んだ。真っ直ぐな瞳が悪戯っぽく細められる。「寂しいです、と答えればよろしいのでしょうか？」

実際にはそんなこと思ってもいない、とても言わんばかりの口調。八雲は苦笑するしかない。

「口の減らない奴だ」

「それは失礼を。正直者なものですから」

明月は不敵な笑顔そのままに、素っ気無い言葉を紡ぐ。

その明月の額に一つ口付けを落とし、八雲は小さく息をついた。次いで八雲の顔に浮かぶのは、口の端を釣り上げるだけの意地の悪い笑み。

「そう言いながらも、こちらの方は一週間待てるのか？」

未だ情事の跡の色濃く残る秘部へと指を伸ばす。指先が湿った秘所へと割り込むと、明月はビクリと身を強張らせた。

「八雲様と、一緒にしないでくださいませ」

「そうだな。一週間後は覚悟しているといい」

息が上がるのを必死に抑えながらも、明月は不敵な笑みを崩さない。

「貴方様は一週間禁欲など、なさるつもりもないでしょうに」

「妬いているか？」

「いいえ、全く」

言葉の最後に、布が肌と擦れる音が重なった。

明月が八雲の元に来てから一ヶ月。その間二人は三日と間を置かず、肌に重ねている。

勿論いつでも求めるのは八雲であり、互いに望んでのことではない。しかし明月は始めに宣告した通り、八雲が望めばいつでもその身を差し出した。

己の身は全て八雲の自由である。そう告げた言葉を、明月は違えなかった。

そして逆に、明月は八雲にすぎること、何かを望むこともしない。

明月の言う八雲のものにはならないというのは、このことを指すのだろう。そう八雲は推測していた。

ならば、明月を己にすぎらせることが出来れば、彼女の全てを手に入れたことになるはずである。

明月は八雲に気を許していない。だから、すぎらない。

それは理解できる。

だが、八雲と過ごしている時の明月は軽口も叩けば笑顔も見せる。無理して気を張っているようには思えなかった。

どうすれば明月を己のものにできるのか。八雲には見当もつかない。

しかし、そのことは決して不快ではなかった。明月と共に過ごす時間は、八雲が今まで得ることのなかった充足感に満ちていたのだから。

一週間の出張公務を終えて、八雲は己の城に帰ってきた。

早速とばかりに明月の部屋を訪ねるが、彼女の姿は見えない。窓から差し込む柔らかな日差しが、簡素な部屋の中を照らしているだけだった。

その場に、主の帰還を聞きつけた配下の一人がやってきた。

「明月はどこだ？」

彼の挨拶を聞くのもそこそこに、八雲はまだ若い配下の青年に問う。

青年は暫し考えるように首を傾げた。

「明月殿は、この時間でしたら中庭にいるのではないかと思います」

「中庭？」

「はい。一日中部屋の中にいるのは気詰まりだと仰って、いつも昼間には中庭におられることが多いようです」

成程、明月は踊り子として各地を旅して回っていた。家の中に閉じこもるのは性分に合わないのかもしれない。

納得しながら、青年にはそうか、とだけ答えておく。

「八雲様は、明月殿が随分お気に入りのご様子ですね」

「ああ、退屈しないからな」

応えると、青年の口の端が歪んだ。

何か言いたいことがあったのだろう。

だが、余計なことは言わない方がいい。そう思っただけ口を閉ざして笑みを形作る。

それもよくあることと、八雲は気に留めることもなく中庭へと足を向けた。

光の集まる中庭は、この城の中で最も艶やかに四季を感じることが出来る場所である。

中央には桜の木が一本、主役然として居座っている。

その桜の木の下に、明月は立っていた。明るいい日差しを受け、長い髪がみずみずしく輝いている。

声をかけようと数歩近付き、八雲はそこで明月の傍らに立つ一人の男に気がついた。

足を止めて、その男を見やる。

線の細い男だ。否、線が細いどころか貧弱と言って差し支えない。顔立ちにはこれといった特徴が見受けられない。

薄汚れた服をまとって髪も全く手入れされていないことが、更に男の印象を凡庸としたものにしていた。

城の敷地内でそのような格好をしている者、となれば間違いなく奴隷として連れてこられた人間だろう。

草木の手入れをしていたのだとすれば、この場に彼がいること自

体はおかしくない。

おかしいとすれば、その奴隷と明月が親しげに会話をしていることである。

明月も物好きなのと八雲は始め呆れはしたもの、特に気に留めはしなかった。

しかし。

明月の表情を見た途端、八雲は言い知れぬ苛立ちを感じた。

彼女は笑っていた。と言っても、八雲といるときにも明月はよく笑う。

だが、今の笑顔は八雲の知るそれとは全く違っていた。

切り取られた青空の下、晴天によく似合う健康的で邪気のない笑顔。

明月にもあのように少女のようなあどけない一面があつたのかと八雲は驚嘆する。

そしてそれと同時に、八雲の中に広がる暗雲は濃さを増していった。明月の笑顔と反比例するかのよう。

大股で歩み寄ると、明月が八雲に気付いて振り返った。

「八雲様。おかえりなさいま……っ」

手首を掴み上げ、引き寄せる。その力の強さに明月が顔を顰めたが、八雲は構わず彼女を引っ張って歩く。

「八雲様？」

城の中へと入ってから、廊下を早足に歩き続ける。その八雲に大人しく従いながら、明月は困惑したように八雲の名を呼んだ。

「私は今日帰ると言っておいたはずだ」

低い声が明月の耳を打つ。

「主の帰宅を、何故部屋で出迎えない」

「え、はあ。申し訳ありません、思っていたよりもお早いお帰りだ

ったものですから」

明月は、何故八雲がこのように不機嫌なのか分からないようだった。八雲自身、己の感情を理解できていないのだから無理もない。突然湧き上がってきた激情に、名前を付けることができなかった。唯一つ理解できるのは、己の中の凶悪な願望が目覚めたという事。それだけである。

明月の部屋に着くと、八雲は彼女を寝台に引き倒した。

半ば放り投げられるようにして寝台に倒され、明月は咄嗟に起き上がるうと腕を着く。

しかし、上半身を浮かせるよりも先に、八雲は明月の首を押さえつける。

「罰を与えなくてはならないな」

うつ伏せに押さえつけられ、身動きの取れない明月に覆い被さると、八雲は彼女の耳に唇を寄せ囁いた。

月を捕えて（後書き）

春エロス参加作品2話目です。

この下に春エロスのサイトへのリンクを貼っておりますので、そちらも是非ご覧になってください。

他の参加作者様たちの素敵な小説も読めます。

そして、3話では終わらないということに気がつきました。

次回更新日は決まっておりますませんが、できるだけ早くします。

月を縛りて（前書き）

序盤からえっちい描写が入ります。
ご注意ください。

月を縛りて

未だ夕暮れと呼ぶにも早い時間。高く明るい日は、くつきりと房事を照らし出す。

抱えあげられた明月の太腿は、体液に濡れ光を反射していた。それを掬い取るように指を這わせると、腰紐で明月の手首と繋がっている寝台が軋む音を立てる。

明月が身を引こうとするのを、その音が即座に伝えていた。八雲は明月の首に手を伸ばして彼女の身体を押さえつける。苦しげに明月の表情が歪み、喉からは細く空気が漏れた。

「逃げられると思うな」

低い八雲の声は獣の唸り声のように、明月を威嚇する。

何かを言おうと明月の唇が動いたが、喉から漏れるのは掠れた吐息のみ。明確な音を形成することはなかった。

八雲が首から手を離すと、急に肺に侵入してくる大量の空気に明月が咽る。首筋には赤く跡が刻まれる。

そこに唇を寄せ、胸を鷲掴みにする。柔肌に齒型がつくほど強く齒を立てる。

明月の小さな悲鳴が聞こえたが、それに構わず更に力を入れると口の中に鉄の味が広がった。

ゆるやかに舌で舐め取ると組み敷いた体が震える。

形の良い胸は八雲の手の中で柔らかく歪んでいた。

明月の中に強引に押し入る。勢いそのままに膣壁を擦り上げ蹂躪した。

手荒な行為に、明月は唇を噛み締めて耐えている。

きつく睨られた目と寄せられた眉、痛みに涙を流しながらじつと堪えるその姿に、八雲はかつてないほど情欲を煽られていた。

薄暗い部屋は、如実に時間の変化を表していた。

暗がりに浮かび上がる明月の滑らかな肌には、いたる所に乾いた血がこびりつき、首や手首に赤い痣がくつきりと浮かぶ。

「怒っているのか」

明月は先ほどからぐったりとうつ伏せに横になったまま、顔を上げようともしない。寝ているわけではないというのは、息遣いから察せられた。

長い髪に指を絡ませながら問うと、明月は顔だけを八雲に向ける。赤く腫れた目が八雲をじつと見た。

「いいえ」

弱弱しく掠れた声で、しかしはつきりと答える。

「申し上げたはずです。私のこの体は、全て貴方様の自由であると」

その返答に、八雲は自嘲気味に笑った。

「私には、怒るのも勿体無いということか」

明月の瞳が柔らかく細められる。口の両端を釣り上げて笑みを形作る。

言葉にされずとも肯定の意がはつきりと伝わってくる。

「ご存知ですか、八雲様」

ゆつくりと、明月は身を起こした。薄い毛布を胸元に引き寄せる。

「怒りが、どれほど強い感情であるのか」

再び八雲へと向き直る。

「怒り、恨み、憎しみ……そのような感情は、簡単に心を支配してしまいます。その対象のことしか考えられなくなるほどに」

明月は傷の塞がりきっていない首筋に手を伸ばす。乾いた血がほつそりとした指先に付着した。

「ですから、私は決して貴方様を憎むことも、恨むことも致しません」

それだけ強い感情なら簡単に抑えられるものではない。そう言うおとしたが、八雲は明月の目を見て開きかけた口を閉ざした。

自信に満ちた明月の瞳に、一切の疑問は封じ込められてしまった。

明月の認識が甘いということは決してない。

彼女は八雲の性格を、残虐な行為を行うことに一切のためらいがないことを知っている。

それを分かった上で彼女は八雲が何をしようとも決して怒りはしないし、止めようともしないのだ。

飯に足を切り落とし、どこへも行けないように、踊れないようにしても。

明月が気を許した相手を、ことごとく殺したとしても。

八雲は明月から目をそらすと、溜息をついた。

苛立ちには既に鳴りを潜め、代わりに倦怠感が身体を埋め尽くしている。

八雲は上着を羽織ると寝台から降りた。

「また来る」

短く言い置いて、八雲は部屋から出て行った。

扉に彼の姿が遮られ、明月が深く安堵の溜息をついたことを、八雲は当然知らない。

そして、それから数日の後。

八雲はまた、部屋にいない明月を探して中庭へと訪れていた。

「またここにいたのか」

桜の木の側に座る明月を見つけ、八雲の声に微かに安堵の響きが混じる。

明月に乱暴を働いて以来、変わったことが二つある。

一つは、明月が部屋にいないことが多くなった。

そんな時、大概は中庭に行けば明月は見つかる。だが、中庭にいなかった時は彼女が帰ってくるまで見つけれないのが常であった。誰に聞いても、その間明月がどこにいたのかは分からない。明月に問うたところで、城内を散歩してただけとしか言わない。

今日は中庭にいてくれた、それだけのことで安心してしまっている自身を、八雲は認めざるを得なかった。

「いつも、こんなところで座っていて飽きないか」

「どうせどこにいても同じようにただ呆けているだけなのですから、部屋の中より大分マシです」

春の風が柔らかく明月の髪を撫ぜていく。
空は薄い雲に覆われているものの、空気はさらりと乾いて暖かかった。

「暇か」

「ええ、かなり」

淡々と、素っ気無ささえ感じる口調で明月は八雲に応じる。

これが、もう一つの変化。

明月は以前に比べて、笑わなくなった。

今までは皮肉を言いながらも微笑むことがよくあったというのに、ここ数日それが殆んどない。

「ならば、もう少し足繁く通うことにするか」

「もう少しも何も、八雲様は異常なほど足繁く通ってくださってますが」

あくまで口調は淡々としている。

拒絶の素振りなど、全く見せていない。

だというのに、それくらいならば暇である方がよっぽどいいという明月の意思が伝わってくるように八雲は感じた。

八雲は間違いなく、失敗をしたのだろう。

明月を手に入れるという試合を進めて行くうえで、致命的な失敗を。

何か挽回の手立てはないものか。

思案しながら、八雲は白い空を見上げた。

月を縛りて（後書き）

遅くなつてすみません。

次回最終話予定です。

早ければ明日、遅くても来週には更新します。

月を抱きて

明月が子を身ごもったのは、それから数ヶ月の後であった。

ここ数ヶ月、八雲と明月の関係は後退するばかり。遠のいていく距離をどうしたら埋めることが出来るのか、八雲はその術が分からないままにいる。

いつからか、八雲は明月と話すことが苦痛になっていった。

手に入らないことを楽しんでいたはずなのに、今は手に入らないことがもどかしくてたまらない。

自然と明月を訪ねる回数も減っていた。

そんな時に明月が妊娠したというのだから、子のできる時機というのは不可解なものだ。

何はともあれ、そのことを知った八雲は喜んだ。否、負けの確定した勝負に希望を見出したと言った方が正しいかもしれない。

これで、明月との関係がよい方向に変化するのではないか。そんな期待を抱く。

母親とは子に情が湧くもの。子を愛しく思いながら、その父親を敢えて拒絶するようなこともしないだろう。

流石にあからさまにはしゃぐような真似はしなかったが、八雲は確かに浮かれていたのである。

だが、その感情に迷いが生じるまで、そう長くはかからなかった。

明月は寝台の上に腰掛けて窓の外を眺めていた。

八雲が部屋に入ってきてても、振り返りはしない。気付いてすらないのだから、当然である。

「明月」

声をかけると、ようやく明月が振り返り、八雲を見上げた。薄氷色の瞳に八雲の姿を映すと、明月は緩く首をかしげる。

「少し様子を見に來ただけだ」

隣に座り、明月の細い肩を引き寄せる。

ここ暫くで、明月は見ただけで分かる程に痩せてしまっている。通常は子供ができればふくよかになるものだというのに、明月はその反対に細く、小さくなっていく。

元から細身ではあったものの、今では壊れてしまいそうなほどに華奢になっていた。

「食事はしっかり摂っているのか」

「はい」

明月の返答は短い。

「……十分な睡眠をとっているか」

「ええ。……どうしたんですか、いきなり」

突然の質問に、明月は不審に思ったようだ。八雲らしくないとおかしそくに笑う。

その瞳にはかつてのような力強さはなく、霧に覆われたかのように光は弱々しかった。

「八雲様に心配されるのは、気味が悪いです」

「私が心配しているのは、子供のほうだ」

そう八雲が応じた途端、明月から笑みが消えた。

困ったように目を伏せ、黙り込んでしまふ。膝の上で固く拳が握られていた。

「明月？」

瞳を覗き込むように視線を合わせようとすると、明月の唇が微かに動いた。

しかし、その唇が何か言葉を紡ぎだすことはなく、すぐに結ばれ

てしまう。

これ以上は、何かを言っても無駄なのだろう。八雲は溜息をつき、明月から離れた。

「私は仕事に戻るが、中庭にでも行ったらどうだ。気分転換にはなるだろう」

明月の様子がおかしいというのは分かっていた。

以前にはなかった不安定さが色濃くなってくれば、誰でも分かる。だが八雲はそれを、子を産むのにも不安があるのだろうと片付けていた。それでも考えなければ納得できなかったのだ。

八雲が部屋を出る直前、明月が何かを呟いたが、それが八雲の耳に入ることはなかった。

それは、許しを請う一つの言葉。

だが聞こえていたとして、八雲は気付くことが出来たのだろうか。

明月の言葉の真意に。

そして、今後待ち受ける出来事に。

明月の子供が生まれたのは、長い冬がようやく終わりを告げる頃であった。

夕方から急に冷え込み、雪の舞う夜に2つの生命が誕生した。

男女の双子である。

明月も子供も健康そのもの、その報告を聞き八雲は一先ずほっと胸を撫で下ろした。

「お会いになれますか？」

立ち合った医者問いは歯切れが悪い。そのことを疑問に思いながらも、八雲は待望の子供と対面を果たした。

先に視界に入ったのは、男の方。こちらが弟なのだという。

まだふわふわとして生え揃っていない髪の毛は、明月と同じく月光に晒されたような青白色。うつすらと開かれた瞼の隙間から見える瞳も、明月と同じ色をしていた。

生まれたばかりな為まだ分らないが、明月に似ているように思われた。

そして、もう一人姉の方は。

「……」

その姿を見た途端、八雲の時は確かに止まった。

明月と似ている。それは恐らく、間違いない。

だが、問題があるのはその髪の色。

金に輝く産毛は、まだ色が薄く柔らかいから、などという問題ではない。

明月と八雲から、そのような色の髪の子供が生まれるはずがないのだ。

明月の青みの強い銀髪、八雲の闇を溶かしたような黒髪、どちらも全く傾向の違う色なのだから。

「どういうことだ、これは！」

我に返った八雲は、側に控えていた医者に怒鳴りつける。

しかし、聞かずとも理解は出来ていた。

生まれた子供は、八雲の子ではないのだ。

明月の態度が不自然になったのも、心当たりがあったからだろう。

八雲の脳裏に一人の男が浮かぶ。

以前に明月が中庭で話していた男。薄汚れてはいたものの、あの髪は日に透けるような金色ではなかったか。

考えるよりも先に、八雲は歩き出していた。

目指す先は奴隷の宿舎。怒気を振り撒いて歩く八雲に、誰も声をかけることができない。

ただ一人、配下の青年が八雲がやってきた方へと歩を進めたただだった。

中庭の横を通りがかった時、八雲は一人の男が立ち尽くしているのを見つけた。

宵闇に紛れても色を失わない金の髪。

骨の浮き出た腕や足を、寒空の下に晒すことも厭わず、ただ立っている。

その視線の先にある場所は、明月の部屋。

瞬間、八雲の心に浮かび上がったのは明確な殺意。

暴れ狂う感情とは別に、八雲の表情は急速に色を失っていく。次いで浮かぶのは狂気。

「子供が気になるか」

中庭に出て、静かな声で問いかける。

男の薄い肩が、びくりと揺れた。

振り返る男の顔は、前髪に隠されて判別できない。

だが、それは確かに先日明月と話していたあの奴隷なのだと分かった。

細い肩を掴み、木の幹に押し付ける。男の口から小さく呻き声が漏れた。

「貴様の子のようだ。嬉しいか」

男が弾かれたように顔を上げたことにより、八雲は初めて男の顔立ちを知った。

痩せて頬がこけているものの、釣り目がちの、身形さえ整えていれば美男子と言っているいい部類の顔である。

「俺、の？」

掠れた声から感情は読み取れない。

喜色とも、戸惑いともつかない。

「心当たりはあるのだろうか？」

言葉として外に出すたび、狂気に八雲の口が歪んだ。

そして、男が答えるよりも先に。

「八雲様……！」

明月の声が聞こえた。

男を押さえつけたまま振り返ると、明月が走ってくる。長襦袢だけを身に付けた格好から、どれだけ彼女が急いでいたのかが窺い知れる。

八雲が男の下へ向かったことを、何者かから聞きつけたのだろう。

二人の間に割り込んだ明月は、そのまま崩れ落ちるように座り込む。

暗がりでもそうと分かる、血の気の引いた青白い顔。

命を産み落としたばかりの、まだ整わない体調で走ってくれば無理もない。

「明月！」

慌てて抱き起こそうとしたのは、八雲ではなく男の方であった。

「日高……」

弱弱しい声で、明月が男の名を呼ぶ。八雲が聞いたこともない、愛おしそうな声で。

これで確定だ。

言い訳のしようなどない。明月の相手はこんな奴隷の男なのだ。突きつけられた真実に、八雲は齒軋りをした。

「八雲様、お願いします。彼を……彼を、殺さないでください。全て、私が悪いんです」

明月の声は、涙で不明瞭になっていた。
だというのに、八雲にはその言葉が大きく頭の中で響いたように感じられた。

お願いします、と何度も明月は繰り返す。
氷色の瞳は溶けてしまっているのではないかと思うほどに、涙を溢れさせている。

八雲はずっと望み続けていた。

明月が己に縋ることを。

それが彼女が八雲に気を許した証になると信じて、願っていた。
だというのに、ようやく叶った念願は、八雲に絶望しか与えなかった。

目の前が真つ暗になる。

訪れた激昂は、八雲の理性を奪い去っていた。

明月の前髪を掴み上げ、顔を近づける。

「とんだ娼婦だな、貴様は」

八雲の意に反して、せせら笑うような声が響いた。

「私に抱かれながら、他の男にも体を許していたとはな」

思ってもいない言葉が出てくる。

そのようなことが言いたいわけではないのに、詰るのを止められない。

「考えてもみれば当然か。気を許してもいない男に、その身を全て自由にさせられるような女なのだからな」

明月は、ただ黙って聞いている。

弁解もしない。

「気付かなかった私が間抜けだったということか」
自嘲的に八雲は笑う。

「罰ならば、私がどんなことでも受けます。ですから……」

「明月、いいんだ、罰なら俺が……！」

明月を止めようとする男の言葉など、既に八雲の意識には入ってこない。

涙を流しながらも、真っ直ぐに八雲を見据える明月に目を奪われていた。

以前のような、八雲が惹かれた強い眼差しに。

「私の罪です。どのようにでも、八雲様のお気の済むままに」

八雲は強く拳を握る。己の掌に食い込む爪の痛みさえ感じないほどに、感情が昂ぶっていた。

「ならば、私のものになるか」

できもしないくせに、と。八雲は続けられなかった。

「承知いたしました」

明月は、意外なほどにあっさりと了承したのだ。

「馬鹿を言うな、できるわけ……」

「そう、確かに私の心は貴方様のものになることはできない」

冷えて赤くなった指先が、手近にある木の枝を拾った。

「私の命も、私だけのもの」

「おい、何を……」

「ならば、貴方様のものにならない部分が消えてしまえば、私の全ては貴方様のものに」

八雲や男が止める間もなく、明月は枝の鋭い切っ先を、迷うことなく己の喉に突き立てた。

「
」

意味を成さない叫び声がこだまする。

それは一体誰のものであったのか。それすらも分からないままに、絶叫は雪に飲み込まれていく。

明月が崩れるようにして倒れこむ。

うつすらと積もった雪に、喉からとめどなく溢れる血液が染み込んでいく。

八雲も、男も。呆然と明月を見下ろしていた。

明月の行動が信じられず、ただ赤く染まっていく雪を眺める。

「なんだ、これは……」

自失の体で、八雲が呟く。

違う、こんなものは違う。

「はは、は……はははははは！」

こんなものは、手に入れたうちには入らない。

乾いた笑い声が空気を切り裂いた。

赤く染まった雪は、穏やかに降り続ける雫と相まって花卉の絨毯のようだった。

その上に眠る明月は、憎らしいほどに美しい。

「逃げるのか……私のものにならないまま」

闇夜でようやく見つけた月は、隠れてしまった。

これから先、どうすればいい。

月を失っては、真の闇が待っているだけではないか。

否、まだだ。まだ、なくしてはいない。

八雲の口が、歪んだ笑みの形を作る。

確かに、八雲は愛しい月を失った。

しかし明月は、また新たな月を遺していつてくれたではないか。
そう、まだ終わりではない。

「逃がすものか」

今度こそ、手に入れてみせる。

宵闇に王の笑い声が響いた。

月を抱きて（後書き）

To be continued?

宵闇の王、これにて終幕でございます。

ここまで読んでくださった方、ありがとうございました！

そして、投票してくださった方、感想をくださった方も本当にありがとうございます。

プレッシャーを感じながらも、大変励みになりました。

あと、ブログの方でこれから暫く宵闇の王の裏話などを語っていきましょうと思います。

現在明月の絵も公開中です。

興味を持たれた方は、是非おいでになってください。

黒い鳥の唄

<http://sacrillege.blog.shinobi.jp/>

それでは、ここまでお付き合いありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8539d/>

宵闇の王

2010年10月8日22時41分発行